

1. 巻頭言

小説家であり劇作家でもあった井上ひさしはある著作にて次のような言葉を残している。

このところわたしは「平和」という言葉を「日常」と言い換えるようにしています。平和はあんまり使われすぎて、意味が消えかかっている。そこで意味をはっきりさせるために日常を使っています。「平和を守れ」というかわりに「この日常を守れ」という。¹

彼のこの言葉ほど戦後 70 数年を経た現代日本の本質に肉薄した言葉はないだろう。「戦争をしてはならない」「平和こそ希求すべき最たるものである」etc... 私たちが小学校、中学校、高校を通して浴びてきたこれらの言葉は、その内容の重要さは言うまでもなく、次へと語り継ぐべき言葉であると同時に、あえてシニカルな言い方をすれば、その言葉の重みだけが置き去りにされたままの鯨張った、かつ手垢にまみれた平和への金科玉条とされているかのようには私には思われる。では私たちは、これらのあまりに「ご大層な」言葉を前にして、その言葉たちに代わる何を伝えていけばよいのだろうか。今年の沖縄フィールドワークへのとば口はここだった。

去年は沖縄にて戦争の記憶がどのようにしてとどめられているのか、「記憶の場」という概念を念頭に置きながら、様々なところへ赴き、それぞれが目と耳と鼻とで感じ、考えた。今年は無言としていたテーマをさらに絞り、沖縄では戦争の記憶がどのようにして語り伝えられているのか、主に戦争を体験していない世代の方々にお話を伺った。いくつかのお話は私たちにとってかなりの衝撃と共に受け止めることとなった。実際に壕やガマ、美術館、祈念資料館を訪れる中で、自分たちの無知を激しく恥じたことも度々であった。そしてほんの少しずつではあるけれど、自身の「日常」と結び付けて考えることができるようになったのではないかと感じ始めている。

ここで述べることは私たちが今回のフィールドワークを通して感じたことの導入に過ぎず、これ以上をこの頁で述べることはあえてしない。ぜひこの後に書かれた私たちの考察、感想をお読みになっていただければと思う。

最後になったが、今回のフィールドワークにてお忙しい中私たちのためにお時間を取っていただき、微に入り細を穿った説明をしてくださった皆様にはここでお礼を申し上げます。私たちの得たものを私たちの中に根付かせて終わらせるのではなく、そこからどのようにして周りの人々と共有する「日常」に繋げていくのか、自身の「日常」の中で絶えず問い続けたい。

京都大学 YMCA 沖縄フィールドワーク実行委員会委員長 山本 悠太郎

¹ 井上ひさし(2018)『ボローニャ紀行』文春文庫 p.133

目次

1. 巻頭言	……………1
2. 報告書の概要	……………3
3. 参加者名簿・スケジュール・収支表	……………4
4. 事前勉強会	……………5
5. 各地紹介・感想	……………7
◎ 一日目(6/21)	
①アブチラガマ	………7
②南風原病院壕	………9
③沖縄 YMCA	………10
◎ 二日目(6/22)	
④チビチリガマ・シムクガマ	………11
⑤佐喜真美術館	………12
◎ 三・四日目(6/23・6/24)	
⑥ひめゆり平和祈念資料館	………14
⑦平和祈念公園	………16
⑧対馬丸記念館	………18
⑨海軍司令部壕	………19
6. 全体感想	……………20
7. お世話になった方々	……………24
8. おわりに	……………25
付録: 今回のフィールドワークでの訪問先関連地図	……………26

2. 報告書の概要

この報告書は、2019年6月21日～24日に行った沖縄でのフィールドワークとその事前勉強会について報告するものである。このフィールドワークおよび事前勉強会の目的と内容は以下の通りである。

目的:実際に沖縄に足を運び、沖縄戦について学ぶ。その際、「記憶の伝え手に会うこと」「慰霊の日に訪れること」の2点を大切にしたいと考える。前者に関して、まずは戦争の記憶をとどめる場所を訪れ、また戦争の悲惨さを今に伝えようと活動した人々の足取りを追う。その上でそのような場所、事物、人々の存在を時代の忘却や隔絶と絶えず戦いながら後世に伝える活動を行う様々な立場の人と関わることで、体験を「語り継ぐ」ことの意味や大切さ、その手法について考えを深める。また後者に関して、慰霊の日に平和記念公園に赴き、京都にいてはあまり分からなかった、この日が沖縄県民にとって持つ意味や沖縄戦との向き合い方を自分の心と目と耳で感じ、戦争から70年以上たった現在の日本を生きるということの意味を問い直す。以上2点を通して、参加者自身が「平和」について考え、それをどれだけ自身の現在の生活と結び付けつつ自分の中で深めていけるのか絶えず模索し、そこで得た考えや問題意識、経験を周りに発信するきっかけとなるよう努力していく。

内容:まず参加者を中心に事前勉強会を行い、沖縄現地で最大限に学ぶための土台を作る。そして現地では、沖縄戦に関する戦跡や資料館を巡り、戦争の記憶を後世に伝える活動を行う方々のお話を伺う(南風原病院壕と佐喜真美術館、ガマでは、解説員の方にガイドや平和講話を依頼した)。また、沖縄全戦没者追悼式前夜祭への参列も検討²しており、その上で慰霊の日、つまり戦没者ご遺族をはじめとした大勢が集う日に平和記念公園を訪れる。フィールドワーク開催中や終了後に適宜振り返りの時間を設け、参加者間で感じたことを共有する。最後には報告書を作成し、本フィールドワークの実施概要と、フィールドワークを通して得られた学びを全国各地の学生やYMCA関係者に共有する。

4節では事前勉強会を、5節ではフィールドワークで訪れた場所を、それぞれ感想とともに紹介する。6節では全体感想と題して全体を通した個々人の感想を載せている。ぜひとも巻末の付録を参考にしながら読んでいただきたい。

² 前夜祭には残念ながら都合により参加は叶わなかった。

3. 参加者名簿・スケジュール・収支表

参加者一覧

京大・文・4	山本 悠太朗	京大・工・2	谷口 朝美	京大・農・3	八十川 環
京大・総人・3	橋本 遼太	京大・文・2	市倉 信吾		

スケジュール

6/21	6/22	6/23	6/24 (有志のみ)
アブチラガマ見学	チビチリガマ・ シムクガマ見学	ひめゆり平和祈念 資料館見学	海軍司令壕見学
南風原病院壕見学	佐喜真美術館見学	平和記念公園訪問	
沖縄 YMCA 理事長 知念一郎さんを訪問		対馬丸記念館語り部 外間邦子さんを訪問	

収支表

1) 収入

費目	内訳 (明細)	金額 (円)
助成金	ユースチャレンジ助成金	72,500
助成金	京都地区 YMCA 三者委員会 (交通費補助)	25,000
参加費	参加者 5 名より	90,104
合計		187,604

2) 支出

費目	内訳 (明細)	企画全体の支出額 (円)
旅費交通費	航空機(72,950)・宿(50,000) ・現地交通費(20,314)	143,264
通信運搬費	報告書発送	3,000
印刷製本費	報告書製本	20,000
施設入場料		10,650
諸謝金		7,616
物品購入費	関連書籍購入費	3,074
合計		187,604

(※報告書製本費および送料は現時点)

4. 事前勉強会

文責：市倉 信吾

実際に沖縄へとフィールドワークをしに行く前に、私たちは3度に渡って勉強会を行った。沖縄戦そのものについて書かれた書籍や映画だけではなく、今回の主題である「記憶の継承」を軸に据えた様々な資料を参考した。ここでは、具体的な書籍・映画の内容については割愛させていただき、私自身が勉強会を通して考えたことを書いていこうと思う。

様々な災害や事件などを取り扱った媒体は、「戦争」に限っても数え切れないほどある。それはフィクションであったりノンフィクションであったり、ドキュメンタリーであったりインタビューであったり、新聞の記事であったり小説であったり、映画やアニメであったりする。SF 作品などの完全なフィクションはまた違うのかもしれないが、そこには何かしらの、また誰かしらの、記憶（あるいはその痕跡）が刻まれている。しかし、いかに作者が巧妙に、自分や他人の記憶をできる限り原型にとどめさせたまま作品・記事を作ったからといって、実際の出来事を私たちが領有することはできない。体験者でさえ、言葉にするときに捨象されるものが必ず出てくるからだ。

たとえば、沖縄戦の戦争体験者へのインタビューや資料、フィールドワークなどを元にして書いた脚本で撮った映画があるでしょう。俳優はもちろん映像効果にもこだわった、より“リアル”な映画だ。もちろん観客の心を揺さぶるものは大いにあるかもしれない。しかし、物語として脚本に落とし込んだ時点で、記憶の断片をかき集めてミンチにしたものに過ぎないことに注意しなければならない。さらに、意識したものかそうでないかにかかわらずそこに作者の意図が混入する。見落したり、無視したりした記憶がある。つまり、記憶を選り好んで付け加え、作り変えてしまうのだ。

勉強会で鑑賞したメル＝ギブソン監督『ハクソー・リッジ』に感じたのは、一人のアメリカ兵士をただひたすら英雄化しようとしている、ということだった。批判すべきことは山ほどあるが、たとえば作品中に登場する日本兵士の描写はあまりにもひどいと言わざるをえず、犠牲となったはずの多くの一般住民についてはまったくシーンに映ることはなかった。そのような点から、おとぎ話として観る分には面白いかもしれないが、出来事に忠実とは言えなかった。

社会評論社『戦争記憶の継承 語りなおす現場から』より、『第2章 沖縄県の戦争体験者のいまー戦争体験の捉え方の変化に注目して』を読んだときにさえ、どこまで忠実になりうるか疑問を抱いた。体験者の語りを文字起こしした文章が主となっていて、先の『ハクソー・リッジ』よりは体験者の記憶に近いのではないかとは思っていたけれども、文字にしたときに失われるものは大きい。体験者はためらいながら話しただろうし、考えながら話したときに言い忘れていたことがあったかもしれない。そもそも「話を聞く場」を設けたときに、体験者

は「話」を用意していたかもしれない。

アラン＝レネの『夜と霧』は、そういう意味で記憶の継承に向いているのではないかと思った。アウシュヴィッツを舞台にしたこの映画は、当時の実際の映像と現在のアウシュヴィッツの映像とを織り交ぜながら現実のみを淡々と映していく。語りは詩的だが、映像以上のことを述べることはない。もはや物語ではないが、強い印象が刻みこまれるように感じた。逆にあまり数字に基づいた表現や個人の経験に基づいた表現はない。だがそれは、いったい誰の「記憶」なのだろうか、という疑問が残る。

ここまで私は記憶に忠実であるか否かという観点でさまざまな媒体を批判してきたが、しかし私は逆に、いかなる媒体も「出来事」に対する人々の「記憶」に完全には忠実ではありえないというこの点を評価することもできるのではないかとも思う。

作者は、何らかの出来事やそれにまつわる記憶を伝えたくて作品を作っているはずである。それはある記憶のほんの断片を拾い集めただけにすぎないかもしれないが、その結果、「100%の出来事」を伝えるという目的から逸れていたとしても、観る者に対して別の形で「記憶」を刻みこむのである。記憶の継承という意味では、ある出来事に対して無関心であった人にある記憶を刻みこむことができたのであればそれは成功だと言うことができるのではないだろうか。起承転結の整った物語であろうはずがない「記憶」が作者や語り手によって「物語」に形成されたとしても、そこにある想いを次の世代に伝えていくにはある程度必要になってくることだと思う。なぜならば、私たちは常にどこかで「物語」を欲しており、「物語」にならない“つまらない”記憶など、もみ消されてしまうことが多々あるからだ。

しかし記憶の授受をする私たちは、それが本当に正しい記憶なのか、常に吟味する必要がある。どのように「物語」へと形成されたのか、そこに誰のどんな「記憶」が含まれているのか、気をつけなければならない。ともすると、作者の意図的な誘導によって誤った理解をしてしまいかねないからだ。しかし資料を数点読んだだけではその判断は難しい。そこで、実際に現地に行って話を聞き、その場所で体を通じた感覚を得るということが大事になってくると思う。文字や映像だけでは見えなかったものが、見えてくる。その経験を繰り返して、より「出来事」に近づくのではないだろうか。

戦争を知らない世代が、さらにその下の世代に戦争の記憶を伝えていくのは難しいことだ。今回私たちが話を聞いた方々も、全ての方が戦争経験者というわけではない。その中で私たちがどのように学び感じ取ることができたか。そしてそれをさらに下の世代につなげることができるか。勉強会を通して、フィールドワークへと行く前の大きな課題を発見することにつながったと思う。

5. 各地紹介・感想

ここでは、四日間に渡る沖縄でのフィールドワークで訪れた九つの場所を訪れた日付順に並べ、個々人の感想も交えながら紹介する。

◎ 一日目 (6/21)

① アブチラガマ

文責：市倉 信吾

糸数アブチラガマは、沖縄本島南部の南城市玉城字糸数にある自然洞窟（ガマ）。沖縄戦時、もともとは糸数集落の避難指定壕だったが、日本軍の陣地壕や倉庫として使用され、戦場が南下するにつれて南風原陸軍病院の分室となった。軍医、看護婦、ひめゆり学徒隊が配属され、全長 270m のガマ内は 600 人以上の負傷兵で埋め尽くされた。昭和 20 年(1945 年)5 月 25 日の南部搬退命令により病院が搬退した後、糸数の住民と生き残り負傷兵、日本兵の雑居状態となる。

(糸数アブチラガマー沖縄戦の実相を現在に伝える—<http://abuchiragama.com/>)

2 日目の早朝、私たちは那覇のバスターミナルからバスに乗って糸数へと向かった。バス停から徒歩で坂を登る。「当時の人たちも、この坂を登ったのかもしれない」。蒸し暑い中息を切らしながら目的地へと歩いていった。沖縄に来て初めてのフィールドワークである。

アブチラガマでは、ガマの中に入る前に一通り沖縄戦とアブチラガマで起きた出来事のレクチャーをしていただき、それからガイドの方の先導でヘルメットと懐中電灯を手に中へと入っていった。中はじめじめとしていて滑りやすく、懐中電灯がなければ真っ暗で前に進めない。今でこそ内部はコンクリートでところどころ舗装され、手すりがついているけれども、当時はそこに何百人もの人が灯りもない中横たわっていたのだと考えると、何よりもまず恐怖が浮かんだ。

以下、ガマの中で見て感じたものを、メモを元にできるだけ時系列に沿って書き連ねていきたい。

・入ってすぐのところいくつかの遺留品が置かれていて、その様子から、沖縄戦から 75 年が経っているのだということを実感した。ガマの中では天井から水が滴っているので、あ

る患者は自分の靴を腹の上に乗せて水をため、それを飲んだという。

・現在の出入り口から下っていき右に曲がると、重病患者室に行き当たる。ここは脳症と破傷風の人の置き場である。これらに認定された人たちはここに放り込まれて「見捨てられる」。しかしその中でも、破傷風の人、「痛みを感じないだろうから」という理由で脳症の人をうらやましがったそうである。この重病患者室は30畳ほどの広さがあるが、元は軍の司令部があった場所だった。石積みで目隠しをし、畳も敷かれた場所であったが、ガマが野戦病院として用いられるようになってからは畳が外されて重病患者室として用いられるようになった。

・自然の洞窟であるとはいえ、手で一部掘られた跡がある。私が覚えているのは、上述の重病患者室入り口である。天井に削られた跡が残り、そこから数センチ突起が伸びていた。ガマは鍾乳洞なので、滴る水に含まれる成分が蓄積してそのようになるのである。1センチ伸びるのにも何十年とかかるというこの突起。やはり沖縄戦から時が経っているのだ。

・入り口から見て左側に進んでいくと、少し開けた場所に出てくる。病室である。そのすぐそばには便所が設けられていて、ガマの中で過ごしていた人たちは壺の中に糞尿をし、それをひめゆりの女学生が毎日外に運んでいった。ひどい悪臭はもちろんのこと、ガマの中で滑って転んで全身にぶちまけてしまうことも多々あったそう。体は洗えても服が乾かないのでいつも体調不良だった。女学生たちは軍医や患者から呼ばれ常に動き回っていた。もたれることのできる壁を見つけては立ったまま5分から10分ほどの仮眠をとってすぐに呼び出される。横になって寝た日はなかったという。

・通路を歩いて奥に進んでいくと、医療器具の置き場や手術室が見えてくる。この手術室では毎日、麻酔なしに手足を切断していた。すさまじい悲鳴が聞こえたという。それでも患者は手術を望んだ。「脳症や破傷風になりたくない」。その一心だった。切断した手足はひめゆりの女学生たちが外へと運ぶ。最初の内は気持ち悪い、嫌だという感情でいっぱいだったそうだが、だんだんと慣れて「○○さんの足だから重い」などと、軽口をたたくようにまてなつたという。

・時期は異なるが、その場所の近くには死体置き場がある。ガマの各所には、そこが何に使われていた場所なのかその名称がプレートで記されているのだが、ここにはプレートが置かれていなかった。正確には、外されていた。元々は「死体安置所」と記されていたらしいが、その名称はおかしいとの意見があつて外されたそう。「安置」などでは決してない、というのがその理由である。つまり、死んだ者はそこにうち捨てられていたに過ぎなかったのだ。

・炊飯用のかまども備えられていたが、煙が中に充満してしまうため実際に使用されることはなかった。そのため煮炊きも女学生が外で行っていた。申し訳程度の握り飯を患者に回していくが、奪い合いやめ事が多発したため、女学生は仕方なく自分の分まで患者に与えていた。いつも全員分足りることはなく、女学生自身も食べられないことが多々あった。

・縦に狭く長い穴があつて、そこにはスパイ認定された人が捨てられた。スパイに認定され

たのは、何の罪もない朝鮮人や琉球方言を話す人だった。

- ・食糧保存庫が現在の出口近くにあつて、米軍に馬乗り攻撃を受けた際に、爆風でトタンが天井に張り付いた。今でもそのトタンは残っている。
- ・出口付近には出て行こうとする住人を射殺するための監視所があった。



ガマの中で灯りを消すと、自分の手さえも見えなくなる。何百人もの生きた人間、死んだ人間、生きているか死んでいるかも分からない人間が、すさまじい臭いと呻きをあげながらそこに確かにいたのだと考えると、恐ろしいというか、悲しいというか、言葉にできない感情が芽生えるのを感じた。

②南風原病院壕 あまりにも自明な忘却

文責：山本 悠太郎

たとえそれが戦場の、そして壕の中のベッドとは言え、そしてそれを見るのが今回で2度目であるといえども、その環境は私が様々な資料を読みながら想像していたものを遥かに凌ぐものであり、私は再び言葉を失うこととなった。

いくつかの資料で南風原病院壕について調べていた時、少女たちは壕の中にベッドを設置し、可能な限りあらゆる医療行為を行った、ということの意味を私は本当には理解していなかったようだ。無意識のうちに私は、現代の病院の廊下のようなところに臨時のベッドが並べられるような光景を、そして電灯の明かりが煌々と降り注ぎ器具も揃った中で、やむなくそこで医師たちが急いで手術を行う様子を想像していたのだ。だから私は、足元のぬかるむ、大人2人がすれ違うのもやっとの狭さで、壁も天井も濡れ、かなり傾斜のついた壕に入った途端、自分がそれまでに得た知識を信じるのが出来なくなった。本当にこんなところにベッドなど置かれたのだろうか、どのようにして1人でも窮屈なこのベッドに2人も寝かせることが出来たのだろうか、こんな真っ暗で滑る廊下の上を少女たちはどうやって立ち回ったのだろうか、そして何よりどうしてこんなところで手術など出来たのだろうか… 改めて私



は自分の想像力の貧弱さと共に、私たちが資料などで得られる知識の限界を痛いほど思い知った。

あの日、あの時、あの場所で何が起こったのか、残念ながら私たちは想像することしかできない。けれどその想像を手助けしてくれるものは資料だけではない。私たちには五官がある。私たちはそのことを案外忘れていたのかもしれない。そして私たち戦争を経験していない人たちがあの経験を伝える際に key となるのはまさしくこの五官なのではないか。ガイドの方の説明に裏打ちされるように私は強くそう感じた。

あの暗く、じめじめとしていて、ぬかるみ、ライトがなければ一歩先も見えぬ、あらゆる音を吸い込んでしまいそうな空間は私たちに、あまりにも自明な忘却を、そして歴史と向き合うことの新たな可能性を沈黙のうちに訴え続けているのかもしれない。

③沖縄 YMCA

文責：市倉 信吾

今回、日本YMCA同盟の紹介を受け、沖縄YMCA理事長の知念一郎氏にお会いすることができた。知念氏は、那覇の壺屋にて私たちを温かく迎えてくださった。

知念氏は9歳の頃に辺野古の収容所にて終戦を迎えられた。国民学校に向かう途中に10・10空襲に遭遇し怯えたこと、転々と戦禍から避難する生活をする中で朝目覚めると周囲を米兵に取り囲まれていたこと、初めて会った米兵は教え込まれていたような「鬼畜」ではなかったこと、一方で捕虜収容所では飢餓やマラリアの危険があったことなど、知念氏はご自身の戦争体験についてお話しになった。

お話は戦争体験に留まらず、知念氏が戦争をどう受け止めたか、戦争から得た教訓は何か、語り継ぐにはどのようにしたら良いかなど、ご自身の考えに及んだ。知念氏は現在の日本社会、国際社会にも広く結びつけておられた。

特に印象的だったのは、「戦争を体験していなくても、戦争を十分に語れる」という彼の言葉だ。戦争を直接体験した人の口を通して発せられる言語化された記憶が強い力を持つということは、想像に難くない。しかし、そうではない私たちが戦争の記憶を語るということについて、そもそも知識や体験が乏しく語るはずがなく、また、語ること自体おこがましいのではないか。少なくとも当時の私はそう思っていた。そんな考えを一蹴するようなこの知念氏の言葉は、私たちが求めてきた「記憶の継承」への一つの答えとなったと思う。「過去と向き合うことだ」と知念氏はさらに言葉を加え



た。子どもたちに戦争について語る機会があるとき知念氏は、必ず戦争それ自体を教えるのではなく、それを通して平和を教えるのだという。なんのために私たちは記憶の継承が必要だと考えるのか。それは、過去の過ちを二度と繰り返さないため、という目的もあるはずだ。ともすると、ある種の学問分野のようにしてただ“正しい”記憶を集めることに終止しがちだが、少し冷静になってその理由や目的を見直すという点で、狭窄になっていた私たちの視野を広げたのではないかと私は思う。

突然の申し出にも関わらず、お話を伺いたいという私たちの申し出を快諾してくださった知念氏に、この場を借りて感謝致します。

◎ 二日目 (6/22)

④チビチリガマ・シムクガマ

文責：橋本 遼太

「近くに存在しているのに結末が全く違った二つのガマ」そういう理由で同じく語られることの多いチビチリガマとシムクガマ。私達は今回この二つに訪れた。ガマとは石灰岩からなる自然洞窟のことで、その形状から戦時中には住民や日本兵の避難場所などに用いられた。

チビチリガマではどうであったか。当時アメリカ兵は鬼畜で、捕まると凄惨な目にあうと教えられていた。アメリカ軍の沖縄本島上陸後、米軍はチビチリガマにも迫るところとなる。はじめに米兵が投降勧告をした。その後、ガマの中から 3 名が竹槍を持って米兵に迫ったところ 2 名が死傷し、ガマの中は米軍に包囲されているとパニックになった。そして捕まることを恐れ、それならば自ら命を絶とうと「集団自決」（強制集団死とも）が行われた。毒入りの注射を待つために行列ができたり、自らの家族を手にかけてたりと、チビチリガマに避難した約 140 人中 83 人の人が亡くなられたという。

シムクガマではどうであったか。同じく米兵による投降勧告があり、自決するべき、戦うべきといった声が広がったが、ハワイからの帰国者であった指導者が「アメリカ人は鬼畜である」という教育を現実とは離れていると知っていたために、住民を説得し投降した。結果として全員が生き残ったという。

この二つの事例はガマの現在にも大きく影響していて、シムクガマはその後住民が戻り持ち物を回収していったため、当時を思わせるものは何一つ残っていなかった。中は広い洞窟になっていて 1000 人も避難者がいたというがみじんもそれを感じることはなかった。ただ穏やかでガマの入り口に刺す光が緑に映えて綺麗だ、と思うだけだった（とはいえ当時のトイレ事情なども聞くことができ、生々しく想像できるものもあった）。

一方でチビチリガマは雨が強く降っていたこともあるだろうが、鬱蒼としていると一番強く感じた。ガマには犠牲者の遺骨が残されており、入壕は遺族会の意思によって禁止されている。ガマ自体も入り口が小さく外から伺うだけでもここに 140 人が避難したとは思えないほどだ。隣には「チビチリガマ世代を結ぶ平和の像」があり平和への祈りが記されている。とても穏やかだなどという感想は抱けないものであった。

私は「沖縄戦の図」を思い出す。その後佐喜真美術館に伺い、そこで展示されていた絵だ。

400×850cm の一面に地獄が広がっている。その中で中央には前を見据える子供たちが書かれている。他ほとんどの人間には瞳が書かれていないが、この数人にだけ瞳が描かれている。真実の目だという。私はこの 2 例の違いはここにあったと感じた。真実の目は案内をしていただいた方にもほぼ共通していた。例えば、「戦争=悪いこと」と言ったステレオタイプで



はなく、「なぜ戦争はしてはいけないのか」という問いに自ら答えを持っていた。私はもしその場にいたとして、最善の判断をできたであろうか。正直な所、その沖縄戦の場にいるということも、あまりの凄惨さに想像もしたくないものではない。特に自らの家族に手をかけるなどとは。だが私自身も、将来真実を見ているか問われる時が来るかもしれない。その時を思うと、勉強するということの大切さを身にしみて感じる。

⑤佐喜真美術館

— 「一番ひどい目にあう側からでない戦争の本当の姿は見てこないのだ」 —

文責：八十川 環

沖縄へ来たのはこれで二度目だった。一度目は昨年のことだ。今回と同じように寮生に誘われてのことだった。再度行くにあたって、何処に行きたいのか尋ねられた。私は佐喜真美術館、と答えたのだった。もう一度『沖縄戦の図』を見たいと思ったからだ。

佐喜真美術館は普天間基地のすぐそばにある。土地が基地に食い込んでいるから、美術館の屋上に上がると基地との境界のフェンスに三方を囲まれていることがよく分かる。フェンスのすぐ向こう（基地側）に、亀甲墓もある。そしてそのずっと奥には飛行場が広がる。そしてもっと先には青い海がある。その海を埋め尽くした軍艦から米軍が上陸し沖縄戦が

始まった。

美術館には『原爆の図』『アウシュビッツの図』『水俣の図』で知られる丸木位里・俊夫妻の作品『沖縄戦の図』が収められている。他にも『チビチリガマ』『シムクガマ』『亀甲墓』など、〈沖縄戦〉や〈沖縄〉を描いた二人の作品を見ることができた。

私自身、戦後の「戦争を知らない世代」の人間で、祖父母たちも戦中は国民学校にも入らないほどの子どもだったから、特に戦争について話に上がることはなかった。文字通り「戦争を知らない」生活を送ってきたのかもしれない。私が学校の教科書で習った歴史の中の「戦争」は、過不足なく「事実」が整理されたものだった。いつ始まって、いつ終戦になったのか。大規模な戦闘・空襲が起こった場所と日付。知識や教養の一つぐらいにしか思っていなかったかも知れない。一度読むだけで頭に入れた気になって、理解したつもりでいたことも否めない。つまり往往にして私は手記や書籍を読む際、文字情報として記述される内容を、そのまま文字情報として処理していたのだ。実際に一人一人に起こった出来事であるということを忘却し、文字を追って情報を得ることで手一杯になっていた。そして本を閉じてしまえば、それまでのことがどこか他人事のように生活する自分がいた。恐らく、戦争とは私の中で「終わったもの」として過去の何か、程度にしか考えていなかったか、〈戦争〉の記憶や体験というものが私の日常生活からはかけ離れてしまっていて、私の想像力が及び難くなっているからなのだと思う。

私が丸木位里・俊の『沖縄戦の図』に惹きつけられたのには、一つ理由がある。それは二人が沖縄戦を直接経験しているわけではない点だ。直接の体験者の語りから、非体験者はどのような形で〈出来事〉の記憶を受け継ぎ得るのか。他者であった画家が、〈沖縄戦〉やあるいは〈沖縄〉をどのように受容し、描くのか。二人の描く絵の中に、そのような手がかりがあるのではないかと思ったのだ。〈沖縄戦〉を描くこと、それは一体何を描くことなのだろうか。

二人が描いたのは兵士同士の戦闘ではなく、地上戦の最中ガマや壕に隠れる住民の姿だった。『沖縄戦の図』において、戦闘を逃れてやっと潜り込んだガマの中、人々は殺し合っている。いや、そうではない、殺されているのだと二人は私たちに詰め寄る。

沖縄戦の図

恥ずかしめを受ける前に死ね

手りゅうだんを下さい

鎌で鋤でカミソリでやれ

親は子を夫は妻を

若ものはとしよりを

エメラルドの海は紅に

集団自決とは

手を下さない虐殺である

丸木位里 俊

自決とは、主義主張を貫く、または責任をとるために自ら命を絶つこと。あるいは自らのことについて他人の力を借りずに決めること。ガマの中の人々は、果たして自らの主義主張を貫くために親は子を、夫は妻を若ものはとしよりを、自らを、手にかけてののだろうか？もしくはこうして互いに命を奪い合ったことで、何か責任をとっているのだろうか？そもそも、ここに描かれている人々にある責任とは何か？生き延びるためにガマを目指したというのに、ガマや壕の中で起こった出来事は、一人一人が選んだ結果なのだろうか？あの酷い戦闘の中、ガマにたどり着く前に命を落とすものが多かったと聞く。

「一番ひどい目にあう側からでない戦争の本当の姿は見てこないのだ」

と言った丸木位里の一言に、二人の一貫した〈戦争〉を描く態度を感じた。一番ひどい目にあうのはいつだって弱者だろう。戦争の命令を下す人々よりも作戦指揮をとる人々から離れた殺戮の現場で生きていかなければならない人々。戦力にならないと置き去りにされた女や子供、老人、病人、指揮する者と異なる言葉を話す者。

一人一人の死が、〈集団自決〉と言い表される。ところで、そうした出来事を「集団自決」と呼び始めたのは一体誰だろう？恐らくは「自決」ではないのに。

二人は〈集団自決〉を国家による直接「手を下さない虐殺」と結ぶ。そうして、画面の右端に、南京での日本陸軍による虐殺を暗示する髑髏の山を描く。〈沖縄戦〉が、日中戦争からの一連の関係の中で引き起こされたのだと観るものに釘を指す。忘れるな。忘れるものならばどうなるかわかっているな、二人の首が髑髏の山の中からこちらを見ている。



◎ 三・四日目 (6/23・6/24)

⑥ひめゆり平和祈念資料館を訪れて

文責：山本 悠太郎

私がひめゆり平和祈念資料館を訪れるのは今年で3度目である。1度目は私がまだ幼かった頃であるから正直なところあまり記憶がない。ただ、女性の方が展示パネルの前に立って何かを説明してくれたこと、それだけはおぼろげながら記憶に残っている。そして神妙な顔をしてその説明に聞き入る母の横顔もなぜか浮かんでくる。2度目は昨年である。物心ついでからは初めてともいえる昨年の訪問は、言葉にできず上手く掴み切れない驚き、そして怒

りのようなものを伴って私を迎えた。怒りの正体はほどなくして分かった。同じ日本で70年以上も前に起こったことであるのに、自分は広島、長崎のことにばかり注目し、またその2つの出来事を学ぶことこそが戦後に生きる自分の義務であると思い込んでいたことを痛烈に恥じたのだ。怒りの矛先はなにも自分にだけ向いていたのではない。沖縄ではまさしく無辜の民、多くは女性と子供と老人の命が同胞であるはずの日本軍によって散らされた。それは前線においてさらに複雑にも、沖縄出身の兵士と内地から来た兵士という構図で見られたことでもあった。このような単純に日本VSアメリカという構図では片づけられない複雑かつ歪な関係、あるいは環境が存在したにも拘わらず、それを教えようとしてこなかった人々、平気で否定しようとする人々に心の底から腹が立ったのだ。怒りの原因を突き止めることは案外容易かった。けれど、あの時感じた驚きとは何であったのか。私は何にそれほど心を動かされ衝撃を受けたのか。それはなかなか答えが出そうになかった。たとえそれが言葉にすることが難しくともなんとか核心に肉薄したい、それが今回のフィールドワークでひめゆり平和祈念資料館を訪れる私の目的となった。

去年は展示パネルの文章を追うことに注意を向けていたが、今年はそれに加えてあの資料館という一つの「記憶の場」がどのような場所で、どのような記憶を伝えようとしているのか、そこにも気を配りながら見学をした。最初の展示室に入り、半時間もしないうちに私は自分の驚きの正体が分かった気がした。



展示の始まりは彼女たちが通った女学校に関する説明とそこでの学生生活から始まる。去年は「メイン」となる戦争体験の話の「導入部」かと思い、ただ文字を追って通り過ぎたパネルを前にし、彼女たちがいわゆるエリートであったこと、戦争前はかわいらしい制服を身に着けていたこと、小さな軽便鉄道で学校に通っていたこと、様々な海外文学に親しんでいたこと、運動も活発に行っていたことなどを改めて知った。私たちが悲惨な戦争の犠牲者として思い浮かべる「ひめゆり学徒隊」の少女たちにも当然ながら平和な学生時代があった。しかし日本が戦争を始め、時局が悪くなると彼女たちは看護部隊として戦場に赴く。展示パネルを追うにつれ、彼女たちの運命も1945年に向けて進み始める。解散命令が出て、ある少女たちは自決し、ある少女たちは投降し、ある少女たちは生き延びた。展示パネルは具体的な数字と共に、一人一人の少女たちの顔写真、その生涯、体験談を驚くほど細かく丁寧に私たちに教えてくれる。ここまで進んだところで私は驚きの正体を分かった気がした。それはこの資料館が単に「戦乱に巻き込まれた少女たちの悲惨な戦争体験」を伝える場ではなく、70数年前に確かに存在した少女たち一人一人がどのように学校生活を送り、様々な夢を見て、語り合い、しかし開戦と同時にどのように戦争に巻き込まれ、どのような生活を送らざるを得ず、そして最期を迎えたのか、あるいは生き延びたのか、「少女たちが生きた証」を

伝える場であったのだ。

私は答えを得た気持ちで最後の展示室を後にした。

だが私の答えはまだ不十分であった。

短い廊下を行くと明るい部屋に行きつく。そこは世界各地にある戦争資料館の試み、そしてひめゆり平和祈念資料館との交流が紹介されていた。一つ一つ説明を読みながら再び気づきを得る。この資料館は単に「少女たちが生きた証」を伝える「発信としての場」であるだけでなく、それを風化させず引き継いでいくための「継承の場」でもあるのだ。つまり過去・現在・未来をつなぐ場であるのだ。この気づきとともに私はかつて抱いた驚きの答えを得たように思った。

私たちは、戦争について学ぶと言うと、どれほど悲惨なことが起こったのかその1点に注目し、知識を得て満足してしまいがちである。確かにそれも重要である。けれど私が思うに、もっと重要なのはどのようにしてそのようなことが起こり、そこに人々は巻き込まれていったのか、そこに目を向け、そして何よりもここでいう人々とは「悲劇のヒロイン」や「勇敢な市民」などではなく(そもそも生まれつきの悲劇のヒロインなどいるはずもない)、私たちとさほど境遇の変わらない単なる無辜の市井の人々であるということをきちんと理解することではないだろうか。こうすることで初めて得られる知識もただ頭にため込んでおくだけではむなしい。私たちはそこで得た知識を可能な限り日常にも結び付けるべきだ。これには様々な方法がある。今海外ではこれを書いている間にも戦闘が行われている地域がある。また日本国内でも戦争に関する議論は様々な局面で立ち現れている。そのような事態に対し私たちはどう考え、どう行動すべきであるか。

今回のひめゆり平和祈念資料館の訪問は、戦争と聞いてすぐに広島、長崎を思い浮かべ、「ひめゆり学徒隊」と聞いて悲劇の少女たちというイメージを当てはめ、ただ彼女たちに同情し歴史を学んだつもりになっていた俗物的日本人には痛烈なる衝撃と無知への憤怒、そして戒めを携え帰路に就く貴重な体験となった。

⑦平和祈念公園

文責：八十川 環

聖書にこう書いてあるのを読んだことがないのか。

『家を建てる者の捨てた石、

これが隅の親石となった。

これは、主がなさったことで、

わたしたちの目には不思議に見える。』(新共同訳 マルコによる福音書 12章10～11節)

去年の沖縄フィールドワークの振り返りを兼ねた聖書研究の時間で Kenty さんが引いた聖書箇所だ。第二次世界大戦で日本から捨て石とされ、アメリカからは太平洋の要石 (Keystone of the Pacific) とも言われ、平和の礎 (Cornerstone of Peace) としての矜持をもつ沖縄について、沖縄へのまなざしの違いについて話し合った気がする。

沖縄戦最後の激戦地となった摩文仁に平和の礎や資料館、慰霊碑などがある。そこには指揮官牛島中将が自決した最後の司令部壕が残り、学徒を始め多くの人々が身を投げたと証言の残る荒崎・喜屋武岬を遠くに見ることができる。摩文仁は沖縄戦激戦の痕跡を残す場所であり、沖縄戦で命を落とした全ての者に祈りを捧げる場として多くの人々を招く。

平和の礎には沖縄戦で亡くなった全ての人の名前が刻まれる。しばしば「(苗字) 女」「(苗字) 子ども」などの記され方があった。一家で亡くなった場合など、遠い親戚や近くに住んでいた人が「あそのうちには子どもがもう一人いたよ」というように申請した場合、そのようになるのとことだった。今年も刻銘者の追加があった。

私たちは6月23日の慰霊の日に摩文仁を訪れた。様々な人があちこちから摩文仁に集まる。誰がどう見たってよそ者の私は、どういう風にそこにいたら良いのか分からずにいた。平和記念公園内をゆっくりと巡るなかで、多くの人々と通り過ぎた。親族の名前の刻まれた場所ではがむ人、花を手向ける人、子を連れてくる人、慰霊碑に仕事仲間と参列する人、鳴り物を連れて練り歩く仏教系の人々、それらを目で追う私。私はここで何をしているのだろうか？何をしたら？何をすべきなのか？そういう類の考えに浸っては、これらの問いは今・ここで立てて何になるのだろうか、とも感じた。そこで思考は止まってしまった。

沖縄という土地に繋がれた沖縄戦の記憶が引力を持って、人々を集めているように感じた。摩文仁に留め置かれた記憶がくる者に語るのだ。慰霊の日を迎えるたびに人々が集い続ける。場所に行くことで、思い出される記憶。場所に強く紐付けされた記憶が集まった人々の心を揺する。集った人々に問うのだ。あなたはどこからきて今、何をしている？平和とは何か。一つの国に一つの歴史ではない。一つの記憶ではない。各場所に結びついた記憶や歴史、物語がその土地で生きている限り、人々の中に記憶や物語が生きている限り、歴史を通して未来を眺めることができる。



⑧対馬丸記念館

文責：市倉 信吾

対馬丸(つしままる)は、昭和19年8月22日にアメリカの軍艦によって撃沈された船の名前である。

昭和16年4月1日の国民学校令により、本格的に子どもたちの教育の中に「戦争」が組み込まれていった。当然、日常生活の中においても「戦争」は当たり前の存在となっており、子どもたちは日本の勝利を信じて疑わなかった。

昭和19年7月7日、最後の国防圏であるサイパンが沈み、軍人を除く日本人1万人(内沖縄出身者は6千人だったと言われている)が犠牲となった。「サイパンでは住民が多くて負けた」ことから、米軍が上陸してくることが予想された沖縄では、昭和19年7月19日、疎開が決まる。

子どもたちは、「3月には戦争が終わる」、「九州では桜や雪が見られる」、「汽車に乗れる」と聞かされていたため、船に乗って疎開することに恐怖をあまり感じなかったらしい。また、学校単位での疎開であったこともあり友達が多かったことも、子どもたちを勇気づけた。国民教育が子どもたちを盲目にしていたのである。大人たちは、海が危険であるということを知っていたために(沖縄周辺では17隻がすでに沈んでいた)、子どもたちを乗せる船は軍艦であることが絶対的な条件だと考えていた。しかし実際にやってきた船は、日本郵政の貨物船を改装しただけのただの輸送船に過ぎなかった。それが対馬丸である。対馬丸を始めとした貨物船3隻と護衛艦2隻が、疎開する彼らを待っていた。

対馬丸は上海から兵隊を乗せて沖縄にやってきていたが、兵隊を降ろして空になった船をそのまま疎開に利用したのだ。窓もなく、蒸し暑い船内はとても眠れるような場所ではなかった。約800名が子ども、残りの800名が一般疎開であった。

長崎に向けて出港した対馬丸だったが、アメリカの潜水艦ポーフィンはそれを沖縄に入る前から攻撃対象としており、22日も早朝から尾行していた。古い貨物船にすぎない対馬丸は船団に追いつくのがやっとで、格好の的となった。ポーフィンから魚雷3発を食らい、沈没する。

10分足らずで沈没したため多くの人が船倉に残されたままとなり、死んだ。生き残った人たちは、救助されるか、救助船に見つからなければ5日間もの漂流生活を強いられた。そして生き残った後も箝口令(事件について一切口を開いてはいけないという命令)が出され、真相は長いこと闇の中であった。

対馬丸の乗船者数と生存者数は原則不明である。当時は詳しい捜査が全く行われず、事件当時の正確な資料が残っていないためである。姉2人が対馬丸に乗った、お話をしてくださった語り部の外間さんも、事件当初はなぜ姉がいなくなったのかわからなかったそうだ。

大人になってからその事実を知ったという。

「人数」ではなく「一人一人の命」が大事なのだと外間さんは語っていた。戦争や災害の規模や悲惨さを推し量るとき、私たちはとかくその被害者の数に注目しがちだが、そこには一人一人の人生や思いがある。しかし当然のことながら何万人もの人生全てを、私たちは、背負うことはおろか知ることさえできない。だがだからこそ、それに圧倒されながら語り継いでいかなければならないのではないだろうか。

⑨海軍司令部壕

文責：谷口 朝美

旧海軍司令部壕は、豊見城市と那覇市の境界近くにある。旧海軍司令部壕はその名の通り、かつて海軍の司令部が置かれていた壕だ。

壕は良好な状態で保存されており、中に入ることができた。壁面や天井にはツルハシで手掘りした跡が無数に残っていた。一体どれだけのエネルギーが、より良い暮らしの実現や文化の発展のためではなく、ただこの壕を掘るために無益に消費されたかと思うと、虚しくなった。

壕に併設されている資料館では、海軍の沖縄根拠地隊司令官であった大田実中將が打った電文が展示されていた。その電文とは、戦況が厳しくなって機能を失った沖縄県庁の代わりに、沖縄県民の状況を本土に伝える目的で、大田司令官が海軍次官に打ったものである。結びの一文は、「沖縄県民斯ク戦ヘリ 県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」であり、この部分は海軍壕公園の慰霊碑に刻まれるなどして特に強調されている。

沖縄戦の戦況が悪くなると、沖縄県民は日本軍からスパイ容疑をかけられることさえあった。日本軍が理解できない琉球言葉を話すことはスパイ行為である…そのような主張がまかり通っていたそうだ。沖縄県民が弱い立場に置かれていたそのような状況下で、大田司令官が、戦闘に駆り出され巻き込まれる沖縄県民の実際の姿を述べたのは、電文として異色だった。

電文は、大田司令官が壕内で自決する 1 週間前の 6 月 6 日に打たれた。戦況が悪化する中、大田司令官はどのような思いを込めてこの電報を打ったのだろうか。切迫した壕内の状況を知る手掛かりは断片的なものばかりで、大田司令官の思いは確かめられない。解釈は後世の人間の想像にのみ委ねられる。



6. 2019 年度沖縄フィールドワーク 参加者感想まとめ

五官で向き合った果てに

文責：山本 悠太郎

私たちが戦争の記憶を書籍や映画で紐解くとき、よく目にする言葉がある、「地獄」だ。あまりに手垢にまみれたその言葉に直面するといつも私の思考は停止してしまう。あまりにコンパクトに表現されたその言葉に私は戸惑い、またあまりに見慣れた言葉であるため今一つ実感が湧かないのだ。地獄とはどのような世界なのか。

イタリアの小説家にプリーモ・レーヴィという人がいる。彼はレジスタンス活動中に捕らえられ、アウシュヴィッツに送られた。そこで見た光景を彼は「新たな地獄」だと自著で度々表現している。なんとか生還した彼は後年、あの大量虐殺を「ホロコースト」と呼ぶことに反対した。理由はさまざまであろうが、その一つにその言葉があまりに人口に膾炙しているが故に、本来あの凄惨な体験は共有できるはずもないのに、その言葉によって人々がさも納得したかのように揃ってあの出来事を想起することに懐疑的であったということがある。彼は自分の体験を著作に著しながらも、結局は非経験者とは共有できないのではないかという絶望と絶えず格闘し、最後には自分で命を絶った。

今私が「地獄」という言葉を目にして、うまく掴み切れないと嘆き悲しんでいる時、このレーヴィの意見は胸に迫るものがある。ではどうすればよいのか。あまりにコンパクトに表現され、手垢にまみれた言葉と私はどのようにして向き合えばよいのか。

私の好きな詩人にチェスワフ・ミウォシュというポーランド人がいる。彼は1943年ワルシャワにて詩を書いた。1943年のワルシャワといえば、ゲットー蜂起が起こっている真ただ中であり、彼の近くではまさにユダヤ人が殺されていた。後年、当時を振り返って彼は、言葉に対する疑念を明らかにしている。言葉では人を救うことも、あの体験を表象することさえも困難であったと。同じことは今回のフィールドワークで訪れた対馬丸記念館の語り部の方もおっしゃっていた。「戦争中は言葉が出てこなかった。家族の名すら呼べなかった」と。自分の命が明日はどうなるかも分からない時、言葉は途端に無力になる。現状を的確かつ正確に表現しようという機能を放棄してしまう。これに代わって今度は身体の果たす役割が大きくなる。それはこれまで著された膨大な書籍が示している通りだ。おそらくレーヴィが「新たな地獄」と表現したのも、そのコンパクトな言葉の背後に敏感で、それ故傷ついた身体性が隠されているのであろう。その身体性を補って初めて我々は彼の体験に寄り添うことが出来る。だからこそレーヴィは「ホロコースト」と呼ぶことに反対したのではないか。

私たちは「地獄」という言葉をしばしば目にする。その言葉を見て、そのまま読み進めて

しまうのでは何も理解していないに等しい。私たちは可能な限りそこに隠された身体性に目を向けねばならない。そしてそのような身体性に肉薄するには直接現地へ赴くことが必須である。今回のフィールドワーク中ガイドの方から教えられた言葉が今も私の胸に残っている。「私たちは目で見て、耳で聞いて、鼻で嗅いで、舌で確かめて、肌で感じる事が出来ます」

「真実の目」

文責：橋本 遼太

今回の沖縄フィールドワークで一番印象に残ったことは「真実の目」である。これは案内をしていただいた人にほぼ共通していたことです。例えば、戦争は悪いこと→悪いことはしない方が良く→戦争反対！という一般観念というカステレオタイプではなく、「なぜ戦争はしてはいけないのか」という問いに自ら答えを持っていました。考えてみると軍国主義もその時代の一般観念であり、飲み込まれると正しい判断力を損ないます。少数派の選択が命を救う（アメリカ人は鬼畜という教育を嘘だと知っていたハワイ帰りの指導者がいた集団は全員が生き残った）事例もあり、多数派は常に正しいとは言えません。人間にとって何が重要なのか、とても大きな示唆を得られたように思います。

「無知によって傷つけられる人々を忘れてはいけない」

文責：八十川 環

丁度一年前、沖縄に行こうと声を掛けられ、何気無く訪れた。あれからあつという間に一年が経って、今度は谷口さんが声を掛けてくれた。沖縄へ行きませんか。またまた二つ返事で参加を決めた。

今年は梅雨が明けていなくて、連日大雨だった。息を吸えばむせ返すほどの湿気の中、山本さんが言った。「あのとき南部に逃げて行った人たちも、こんな天気の中だったんじゃないかな。」バス停〈糸数入口〉で下車し、アブチラガマまで歩く。小高い丘の斜面にアブチラガマはあるから、坂の急な丘を暫くてくてくと登らなければならない。「ガマや壕の中に逃げ込めた人たちは運が良い方で、辿り着く前に多くの人々が途中で亡くなった。」手記や証言をまとめた文章の中で何度も出会った言葉の意味が、いつ着くのか分からない丘の斜面を登りながら漸く体感を持ち始めた。アブチラガマは洞窟陣地→南風原陸軍病院糸数分室→軍民混在避難壕とその機能を変遷していった。生き残った住民と日本兵がアブチラガマを出たのは日本が無条件降伏した八月十五日から七日も経った八月二十二日のことだったという。多くの証言やアブチラガマ見取

り図の公表で、平和教育に関心を持つ人々の注目を集め、「沖縄戦追体験の場」「平和教育の場」として知られるようになった。「まだ骨があるのか」と聞いた子がいたそうだ。最近の子には共感する力がない気がします、と心配していた。確かに、語り部として真摯に言葉を選んで説明している最中に傍からそのような聞かれたらショックだと思う。しかし(知ろうとしない態度云々の話を一旦置いてしまうが)何も知らずに連れられて来て、亡くなった人々が多くいたという話を聞いたら、子どもに限らずそう考える可能性は否定できない。「思ったとして口に出すのか」という問題もあるのだろうが、(ある種、行うこと自体に重きが置かれている)平和学習の限界がもたらした結果なのではないかと思う。相手や事態を主体的には考えたこともなく、何も知らない状態で、心を寄せる・共感するふりは出来るかもしれない。しかしそれはあくまで反応の仕方に慣れている、というだけな気がする。適切なタイミングで適切な反応を示すということももちろん重要だ。しかしやはりそれは時間を無難にやり過ごすための振舞いであって、やり過ぎしてしまった時間が本人の中に何か(本来の平和学習が求めるような)種のようなものを残すかどうか、私にはまだ分からない。試行錯誤の中で考えるからこそ人は育つのではないだろうか。しかし、無知によって傷つけられる人が存在することを忘れてはいけない。その子のその後を私は知らない。或いは、私自身もその子なのだろう。

今回、行く先々で職員の方やガイドの方からお話を頂いた。話を聞くうち、たくさんの今までバラバラに考えていた事象が互いに影響し合っていたことに今更気がついた。何故、「恥ずかしめを受ける前に死ぬ」という言葉が力を持ったのか。当時はそういう教育が徹底していたというのがそれだけなのだろうか、と私は飲み込めないでいた。沖縄に配置された陸軍第三十二師団に合流した陸軍第六十二師団は、中国山西省に置かれた部隊だった。日中戦争の中、首都南京掃討作戦に従事し、捕虜・一般住民を虐殺した。彼らの行った残虐行為が今度は沖縄で自分たちに迫っている、そう彼らは確信するのだ。私はその話に納得すると同時に、その生々しさ故にその因果を理解し所有することに抵抗を感じた。また、光州民主化運動を力で鎮圧した韓国軍の兵士は、ベトナム戦争でアメリカ軍と共に戦う中で、(結局、軍の中にも人種差別があるから黄色人種は最も危険な場所に配置され、)凄惨な戦闘により兵士の精神が壊されていたのだ、という話もあった。一回生の冬、「韓国に行きたい」というあまりに単純な理由で行った光州。そこで訪れた光州 5.18 国立墓地を埋め尽くす土葬墓の延々と続く連なりと緊張を思い出した。丁度人間の大きさの分だけ土の盛られた墓の一つ一つが、一人一人の死をただまとめた数字で示すことを拒絶していた。思いがけない所での光州との再会は、世界の狭さというよりも過去の存在無くして現在も未来もないのだという至極当然な道理を私に突きつけた。(何度目だろう。)

企画を丁寧に組んでくれた谷口さん、山本さん、私の綱渡りな運転に悲鳴をあげる事無く自然体で耐えた寮生の皆さん、送り出してくれた皆さん、現地で受け入れてくれた皆さんに心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

「人が語り伝えるということの可能性」

文責：谷口 朝美

今回のフィールドワークでは、語りを聞くことに主眼を置いていた。フィールドワークで様々な方のお話や話し方に触れて、人が語り伝えるということの意味を感じ取った。

アブチラガマを案内して下さった具志堅さんは、小学生をガマの中へと案内するときにかこう語りかけるそうだ。「今から入る場所(ガマ)は、今でこそこんな場所に入りたくないと思うかもしれないけれど、戦争の時は皆が入りたがったんだよ」「ここは沢山の人が亡くなったところだけれど、亡くなった方は皆がここに入って、知ろうとしてくれることを喜んでくれるよ」小学生に恐怖で耳を塞がれてしまわないように、小学生に言葉が伝わるように工夫していると仰った。

対馬丸記念館の外間さんは、「あなたたち今いくつ？」と私たちに尋ね、話す相手である私たちを見つめ、私たちに響くように話題を選んで話して下さった。年齢が近いという切り口から、戦没学徒木村久夫の言葉や、現在の高校生の言葉を紹介して下さった。

戦争の過ちを繰り返さないためには、事実は残され、時代を越えて伝えられねばならない。そして事実を人に伝えるには、適切な伝え方が必要である。伝わるように伝えなくてはならない。本や資料館の展示はいったん出来上がってしまえば相手に応じて変わることはできないけれど、人は、相手に応じて工夫して伝えることができる。そのような、人が語り伝えるということの可能性を、現地で語る方々が実証していた。

記憶と物語

文責：市倉 信吾

親の仕事の都合で転勤族だった私は、長崎で大半の時間を過ごしたが、沖縄には幼稚園のころ2年間だけ住んだことがある。当然、覚えているのは自分の家と幼稚園、そしてわずかばかりの方言だけではあるのだが。実に15年ぶりとなる沖縄は、例年よりも遅い梅雨入りの影響による雨と暑さと湿気で私たちを迎えた。懐かしい匂いが、鼻をくすぶった。

人の記憶というものはあいまいで、不確かなものである。どれだけ鮮明に覚えていると思っているものでも、実は後から改変されたものに過ぎなかったり、現実には存在しないことがらが付加されていたりする。

今回のフィールドワークのテーマは「記憶の継承」についてであったが、お話を聞いたガイドさんのほとんどが戦争非体験者であるというのは、戦後世代、つまり“戦争体験”を非体験者から受け継ぎ、さらに非体験者に受け継がなければならない私たちの課題を直視させ

るものであったと感じている。

沖縄フィールドワークを企画し、様々に対応してくれた寮生の山本氏が、それぞれのガイドさんに質問していたことがある。「お話をするにあたって、話す内容を変えてお話することはありますか」。つまり、ガイドさんがお話するのは何も私たちにだけではなくて、小学生や修学旅行に来た中高生も含まれており、それに合わせて話しをするかということだ。彼らに話しをする段階で、言葉を選ばなければならなかったり、伝えない情報があったりするというのがその答えのほとんどであった。

沖縄に修学旅行で来る学校は、申し訳程度に平和学習をするところが多いらしい。そのためか、ガマに入っても、先生も一緒になってはしゃぐことがあるとのこと。「最近の子は痛みに寄り添えない」という声も聞かれた。そんな中で私は、「子どもたちの質問や発言が大事」という言葉に心惹かれた。「今の子はこういうところに興味があるのだ」ということに気づくことができるからだそう。それに、話をする上でどうしても言い忘れてしまうことがあったり、聞き手との間に齟齬が生じてしまったりすることは多々ある。そういったことを、相互に「話し合う」ことで解消していくのが大事だと思った。

戦後に、戦争体験者が自らの体験を語ってそれらを示し合わせたとき、お互いの言っていることが異なって口論になったという話も聞いた。体験者でさえ、視点も異なるし記憶も異なるのだから、非体験者に語り継がれる時点で実際の体験とは違うものができあがってしまう可能性が非常に高いのだ。

それでも私たちは語り継がなければならない。「非体験者でも戦争を語ることができる。過去と向き合うこと」。体験者である沖縄 Y の知念さんからいただいた言葉だ。

7. お世話になった人一覧

- ・ アブチラガマ
具志堅美千代さん（沖縄県南城市中央公民館 館長）
- ・ チビチリガマ／シムクガマ
青山礼子さん（読谷村観光協会 理事兼観光ガイド）
- ・ 対馬丸記念館
外間邦子さん（対馬丸記念館 語り部）
- ・ 佐喜真美術館
佐喜真道夫さん（佐喜真美術館 館長）
- ・ 沖縄 YMCA
知念一郎さん（沖縄 YMCA 理事長）

8. おわりに

文責：市倉 信吾

この企画は、日本 YMCA 同盟第一回ユースチャレンジと京都地区 YMCA 三者委員会からの助成を受けて開催することができました。沖縄フィールドワークに協力して下さった全ての方々に感謝するとともに、この報告書の内容について誤りや不足があった際には私たちに責任があることをここに明記します。また、報告書完成が大変遅くなってしまったことを深くお詫びします。

*

このフィールドワークでは「記憶の継承」をテーマにしてきた。私たちのこの報告書も、当然のことながら「記憶」を受け継いでいく必要性がある。しかし、果たして報告書や報告会での発表でどこまでそれが実現可能だろうか。私は、参加した皆の力のこもったこの報告書を編集しながらそう思った。

報告書を読むと、訪問した先で得た感情や考えが体の感覚を伴って蘇る。だが沖縄に行ったことのない人にはこの文字情報が誤って理解され得るし、写真一つとってみても、何を写したのかさえわからない、ということがあるのではないかと思う。そもそも A4 数十ページに過ぎない分量で全てを伝えきれはるはずもなく、読者がうまく内容を掴みきれないのは書き手である私たちにも責任はあるだろう。

ここで私が伝えたいのは、ぜひとも実際に沖縄に行ってほしいということだ。今述べたように報告書には限界があるのだから、自分の目で見て、耳で聞いて、肌で感じてほしい。月並みな言葉になってしまうが、そこでしか得られないものが必ずあるはずだ。この報告書が、その足がかりになればと思う。

付録：今回のフィールドワークでの訪問先関連地図

図：沖縄本島概略図。斜線部は本島における米軍基地のおおよその敷地を示す。



訪問地一覧

- ①アブチラガマ(南城市玉城糸数 667-1)
- ②南風原病院壕(島尻郡南風原町)
- ③沖縄 YMCA(那覇市壺屋 2 丁目 17-3)
- ④チビチリガマ(中頭郡読谷村字波平 1153)
シムクガマ(中頭郡読谷村字波平 438)
- ⑤佐喜真美術館(宜野湾市字上原 358)
- ⑥ひめゆり平和祈念資料館(糸満市字伊原 671-1)
- ⑦平和祈念公園(糸満市字摩文仁 444)
- ⑧対馬丸記念館(那覇市若狭 1-25-37)
- ⑨海軍司令部壕(豊見城市字豊見城 236)

上の図で分かるとおり、本島だけでもこれだけの米軍基地が存在する。今回お話を聞いた多くの方が沖縄戦当時の話だけではなく現在の基地問題にまで触れられたのは、「沖縄では今もなお戦争は終わっていない」ということを暗示していたのではないだろうか。

付録 2: 沖縄の美味しいごはん

せっかくなので、沖縄に来たら外せないごはんを 3 つ紹介しておく。他にも美味しいごはんがいっぱいあるので現地で食べてみてほしい。



← ラフテー (写真中央) は、角煮のような料理。やわらかくておいしい。



←ソーキそば (写真右) は、沖縄そばに豚のスペアリブが入ったもの。詳しくは「ソーキそば 沖縄そば 違い」で検索してほしい。



←ステーキも外せない。A1 ソース (写真右奥) をかけて召し上がれ。沖縄では食事のべに食べることもあるとか。

京都大学 YMCA 沖縄フィールドワーク報告書

2020年1月14日発行

編集：市倉信吾 付録イラスト：榊沢=マーシー

発行：京都大学 YMCA 地塩寮

〒606-8302 京都市左京区吉田牛ノ宮町 21 京都大学 YMCA 地塩寮

京都大学 YMCA 地塩寮の公式 HP：<https://chienryohp.wixsite.com/chienryo>

Twitter：<https://twitter.com/chienryo>

YouTube：「塩野香」で検索！

京都大学 YMCA 地塩寮 TEL：075-751-9744

ご感想・ご質問・ご要望などございましたら、以下のアドレスまでご連絡ください。

chien_de_yukkuri@yahoo.co.jp